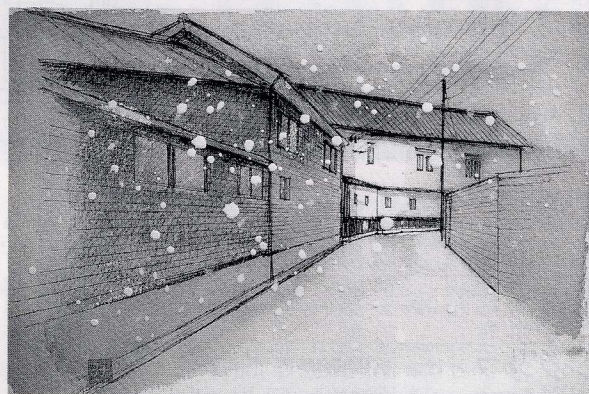
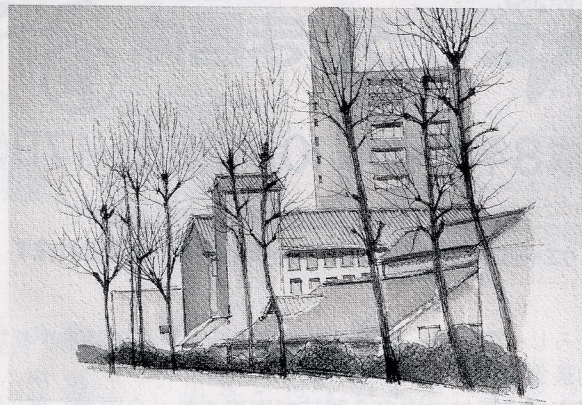


特集2

新入生へのアドバイス第二弾！
大学町「西条」を考える



絵・景山満子



絵・景山満子

ある人は次のように言うかもしれない。「大学は三日も居れば居る価値がない」と。またある人は次のように言うかもしれない。「大学に私は私の人生を賭けた」と。

人さまざまであるので、ここではその是非については問わないことにしよう。しかし、確かに言えることは、私たちはさまざまな年齢の人々、さまざまな職業の人々に囲まれて生活しているということだ。

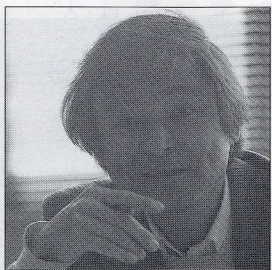
従って、私たちが生活を送る場合、そのような老若男女さまざまな人々と生活を共にすることによって、人生に一層の深みをもたらすと考えることができます。そうであるならば、学生街の誕生は待望久しいものといえるでしょう。

今回の座談会では、下見学生街を取り上げました。座談会のあと、今回の司会を務めた安藤広報委員会副委員長は、次のように語っています。

「新入生が東広島での生活を始めるに当たり、「役に立つ情報」や「注意点」を予め伝えておこうということで、広報委員会は今回の座談会を持ちました。全ての学部から学生を出したわけではありませんが、一般的な広大生の東広島での生活と彼らの要望が読みとっていただければと思います。」

新入生は先輩たちの忠告をよく聞いて、有意義な大学生活を送ってください。志を高く持って、決して易きに流れないでください。

大学当局や教官に対する生の声もあります。今後の大学改革や運営、町づくり、さらには教官一人一人の学生認識の一助にしてください。」



司会

安藤 正昭 (あんどう・まさあき)

総合科学部教授

昭和四十八年三月

広島大学大学院理学研究科

理学博士

〔専門〕脊椎動物の環境適応機構

安藤正昭 座談会を開催する前に、皆さんにまずお礼を申し上げたいと思います。この寒いところで、忙しいなかを皆さんにきていただきまして、ありがとうございます。ありがとうございました。あまり固く考えないで、日頃思っていること、それから地域に対して広島大学はこうあってほしい、あるいは学生にとってはこういう町にしてほしいとか、そういうことをいろいろ話してもらいたいというふうに思っております。

では、簡単に自己紹介してもらいましょうか。その方が馴染みが出るかもしれないから。

中川昇 おはようございます。総合科学部の四年生で、中川昇といいます。簡単にプロフィールから。趣味は、将棋とかが好きです。あと、オリキヤンなどの学生行事に興味があります。将来就きたい職業は、一応、N.T.Tに内定しています。まだ何をやるかわからないですが、通信とか、通信業界に興味があるので、そっちの方で働きたい。

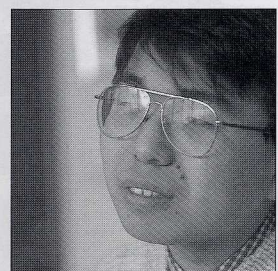
齋藤昌子 工学部の第四類で建築の勉強をしています。三年生の齋藤といいます。将来は自分の小さいときからの夢である建築家になろうと思ってる。大学にきました。三年間の大学生活の

活動では、オリエンテーションキャンパスとか大学祭に取り組んできました。北村以知郎 法学部の法学科二年生の北村と申します。いつも、これを自己紹介のついでに言っているの言わせていただきますと、珍しい出身地で、岐阜県の関市というところから参りました。これを言うとうちが話のネタになります。

まだ大学にきて二年で、今度やっつゼミの方に入って、深く勉強の方をやっていくということになります。将来の目標としては漠然と公務員になりたいと考えています。

中村径雄 医学部保健学科作業療法学専攻の中村と申します。根っからの広島の人です。広島弁で分からないことがあったら、私に聞いてください。

本山和寿 学校教育学部の三年生の本山和寿です。本来ならここに女性が座



中村 径雄 (なかむら・みちお)

(学部・学科) 医学部保健学科作業療法学専攻三年

(出身) 広島県広島市

(趣味) 書道

(将来の希望進路) 作業療法士

町と生活環境

藤田貴子 生物生産学部四年の藤田です。一応出身は山口の方なんです。富山、青森、名古屋と転居を繰り返しております。現在家族は名古屋にいます。だからこちらの方へくるのに抵抗はなかったんですが、やはり生活してみていると思うことがあります。

いま四年生なんです。進学してもう二年間こちらに居ることになっています。

黒仁田崇 文学部哲学科三年の黒仁田

安藤 それではさっそく今日の会の趣旨の方に入っていきます。まず、町と生活環境、つまり学生にとってその町と生活環境というのをど

です。出身は九州の佐賀県。僕は越智先生からたまたま研究室に居るときに「出てみないか」と言われてやってきました。

安藤 一応これで学生さんの紹介は終わりました。本日、アドバイザーといまして、越智委員長と、それから保健管理センターの方から児玉先生にきていただいております。

児玉憲一 現在、カウンセラーは、精神科医を含めて全学で九名おり、カウンセラーのもとに一年間に約四五〇名ぐらいの学生が相談にきています。

しかし、かなりの人はカウンセラーやカウンセリングというものを知らないと思います。今日はこういう会で、われわれカウンセラーのもとを訪れない学生さん、大多数の学生さんのいろんな意見を聞けると楽しみにしております。

ういうふうな考えているのか。あるいはどういいう生活環境が望ましいというふうな期待しているかというふうなことをお話ししてもらいたいと思います。

次に、皆さんの要望というか、こういう町にしてほしい、あるいは大学に対して学生はこういうことを望んでいるんだ、というふうなものを出してもらって、調和のとれた学生街というもの、学生街の理想像をつくりあげてしまおう、ということだ。

また、現在、大学改革が実際に進ん



(写真提供=庶務部企画調査課)

ですが、これはひょっとしたら、学生さんにとってはあまり身近に感じないかもしれません。あるいは質問がありましたら、知っている限りでお答えいたします。そういうかたちで、大学がちょっと動きつつあります。ではまず、町と生活環境ということから始めたいと思います。

生活する上で、西条というのはこういう面がいいとか、あるいは生活する上でこういうところが不便であるというようなこと。そういうものを出してほしいと思います。

西条の町の好きなのところ

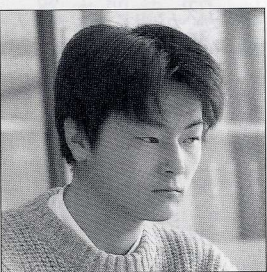
藤田 今日雪が降っていますが、西条は自然が多く残っているということですね。キャンパス内に緑が多いですし、私なんか自然散策、特に山歩きが好きなんです。鏡山公園なんて学生でも登れますし、そういう意味で、都心の生活と自然が密着しているところがあると思います。

ただ反面、これはいい面であげましたけれども、逆の意味でも言えると思います。学生の皆さんはあまり東広島市に興味を持たれていないみたいなん



藤田 貴子 (ふじた・たかこ)

(学部・学科) 生物生産学部・生物生産学科食品系
コース四年
(出身) 山口県小野田市
(趣味) 自然散策、合宿
(将来の希望進路) 製造業
(一言) あと二年は西条に残ります。



黒仁田 崇 (くろにた・たかし)

(学部・学科) 文学部哲学科倫理学専攻三年
(出身) 佐賀県唐津市
(趣味) 映画鑑賞
(将来の希望進路) マスコミ

ですが、この点はちょっと気になります。**北村** 僕の場合は、去年一年間東千田キャンパスで勉強しました。広島は、それなりに大きな町です。そこに住んでいて、こちらに引っ越してくるといときには、何と言うか、最初のイメージとしては、非常に悪い言葉だと思ってしまうのですが、田舎ではないかというそういうイメージを持ってきたんです。

学生に西条のいいところをあげると言ったら、まずほとんど、全員が全員と言ってもいいほど出てくる答えは、まあ自然でしょう。これだけではあまりにも、ある意味では無個性です。僕は本を読むことが好きなんです。西条の図書館というのがなかなか捨てたものではありません。東広島市中央図書館です。地方の都市というのはどうして図書館関係、文化関係が充実していないというイメージがあったの

地域との関わりを考える

ですが、こちらの中央図書館なんかは結構、町の規模から考えたら、蔵書の内容とか量に関してなかなかいいものを持つています。僕は好きなんです。学生がなかなか行っていないように思っています。専門書が読みたいだけだったら、大学の図書館がこれでもか、というくらい揃えてくれています。でも、読む本というのは専門書だけではおもしろみのない生活ですから、本が読みたいときに、あの市の中央図書館というのは非常にありがたい存在として、僕は西条の好きなの点としてあげたいです。

中村 広島市の南区の黄金山という山のふもとに二十一年近く住んでいます。住んでいる土地は西条に似て静かなところなんです。違う点と言えば、交通の便が西条よりはいい点と、人との交流が目に見えるというイメージです。西条でもその二点を改善していく必要があると思います。やはり、地域の人との交流が少ないですね。

安藤 それは学生さんと地域の人の交流ですか。

中村 そうです。

越智貢 中村さんは広島から通っていらっしゃるんですね。こちらに通ってみて、学生たちと地域の人びとの交流というのが少し濃くないな、と思う具体的な例というのはどういうものなんでしょうか。その辺をちょっと聞いてみたいですね。住んでいらっしゃる方はどうなんでしょうか。

黒仁田 今住んでいるところは大体学生ばかりなので、地域との関わりというのは確かに少ないです。

中川 僕は友だちと一軒家に住んでいます。普通の住宅なので、町内会もありますし、月一回の道路掃除とかもあるわけですが、だから個人としてはそこそこの交流があるんです。僕の友だちも隣の家に家庭教師に行っているし。そういう交流はあるんですが、ただ学生全体として見たときに、確かに学生という一まとまりと地域の皆さんとどういう交流があるかというところ、やっぱりなかなかない、というのが現状ではないかなと思います。大学祭でも、実際に来ている方はいると思うんですが、一緒に活動しているのはなかなかないです。例えば大学祭の店出しを住民の方から募集したりするのもおもしろいかな、と思います。

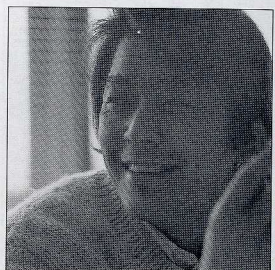
大学祭も、僕らは一年生のときぐらいしかあんまり関わっていないんですが、どうも学生の、店を出している主催者が楽しむための大学祭になっているようなところがあると思うので、もう少し参加者のための大学祭というか、いろんな人との交流する場であるというような目的を持ってやっていけるよ

うなことを思ったりするんです。そういう意味ではほかに、考えたらいろいろと方法はあるような気がします。
本山 研究室の話になるんですが、美術研究室では毎年卒業美展を開催しており、今年も広島市内の県民センターと東広島では大学会館でやりました。そのあと聞いた話なんですが、東広島市の美術館が僕らの美術展のためにわざわざ日数を空けてくれていたらしいんです。僕たちが西条に来たから、もちろん絶対やってくれるだろうということ。

僕たちは全然そういうことは知らず、地域の人たちが受け入れてくれる態勢をとってくれているんだけれど、僕たちがうまく積極的に協力できないんだな、と反省したんです。
越智 結局開かなかったわけですか。
本山 そういふのを知った時点で遅すぎたんです。大学会館をとってしましたし。

越智 それは残念でしたね。
本山 だから来年、四年なんですけど、来年からは東広島市の美術館で開くつもりではいるんです。
しかし交通の便が悪く、それだとちょっとOBの人もこれないだろうし、場所もよくわからないから、そこら辺をどうしようかな、ということになるんですが、空けてくれているというのを聞いた時点で、そんなに僕たちのことを考えてくれたんだな、と。

越智 期待してくれているんですね。その辺の意思の疎通をはかるルートみたいなものを開発する必要はあるで



越智 貢 (おち・みつぐ)
広報委員会委員長
文学部助教
昭和五十七年三月 広島大学大学院文学研究科
博士課程後期単位修得退学
現代倫理事例研究(コンピュータ・エシックス、学校問題など)

しよう。先ほど中川さんがおっしゃったのも、要するにプライベートには地域と関わる部分があるけれども、何とか、必ずしもプライベートではな

情報システムの確立を

中川 今の話にも関連すると思うんですが、地域の方と学生、もしくは大学、その三者のあいだのパイプラインと言いますか、連絡システムというのが本当に少ないというのを感じています。
阪神大震災のときもあつたんですが、

そういったときにボランティアを集めたいが、とか、そういった情報が本当に行き渡らないというのを感じたので、そういうボランティアにしても、今の美術館の話にしても、そういうのは本

当に氷山の一角だと思つたので、もつと情報をオープンにし、いろんな人が情報を収集できるようなシステムができれば、これからの学生街にしても、学生の意見がもつとと反映されていくだろうし、まず絶対必要なのが、そういう情報システムというものかな、というふうには思っています。
安藤 ある意味では、地域もまだ大学

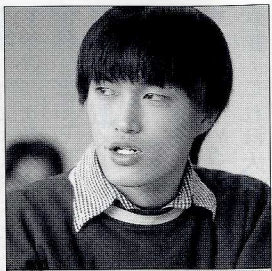
との対応に慣れていないから、もうちょっと時間が要するのかもしれない。広島にいたときには、かなり昔からの歴史があるから、一応のルートが自然にできあがっていた。ここでは創つていかなければいけないことですね。
藤田 先ほどの情報の話なんですけど、学生に回ってくる情報の量が非常に少ないと思います。東広島にお住まいの方もいらっしゃるし、私もそうなんですけど、一般に、まず大家さんとのパイプラインというのが最初にできるわけじゃないですか。

ところが、そういったつながりが東広島ではまずないんです。生協の物件も多分そうなんですけど、大家と店子という関係がないんです。
安藤 家賃はどうやって払うんですか。
藤田 振り込みで、顔の見えない大家さんにお金を払うようなかたちになっ

ています。
中川 うちなんか、毎月一回大家さんがきて掃除して。
藤田 いいですね。
中川 たまにびっくりするんです。パッと見たらうしろにいたりして。
藤田 うちの隣に大家さんが住んでいるので、私の場合はほかよりはありますけれども、同じアパートでもみんなそういうわけでもないです。東広島市に住んでいるが、その情報は何かない。だから図書館でいろいろ催しがあるんですが、実際にそれを知っている学生はいないと思いますし、地域からの情報量が少ないばかりに、興味がある人も知ることができない状況というのも多いようです。

越智 もし広島に住んでいたら違ったとしたら、そういうところというのは、広島の場合は是正されていると言いか、もう少し情報を得ることができそうな態勢にあるんですか。
藤田 生活環境の話なんですけど、地域的な催しに関しては広報があります。何をやるにしても広報活動があると思うんですが、それを目にする機会、目に入る機会というのが広島市は充実している、広島の方が十分に広報がされていると思います。それと比べた場合に、東広島市ではまだできていないんじゃないでしょうか。

北村 僕も去年ここに一年間住んでいましたが、一年住んでみて、地域の情報が入るといふのは東広島市の広報が月に一回はポストに入っていますが、それだけなんです。



北村 以知郎 (きたむら・いちろう)
(学部・学科) 法学部・法学科二年
(出身) 岐阜県関市
(趣味) 読書、水泳
(将来の希望進路) 公務員

僕みたいに、本当に学生アパートしか建っていないような地域に住んでいる場合には多分むずかしいと思います。が、広島に住んでいたときには、アパートによく回覧板とか回つてきたりして、その町内のニュースとかがいろいろと入ってきていましたけれど、そういう、それプラス、もちろんもうちょっと大きなところからの情報というのがありますから、それを考えると東広島というのは、市単位での情報しかどうしても入ってこないというのを感じます。本当に自分の住んでいる家の周りのことというのは、ほとんど何もわからないと言いますか。

は配布を増やしているようですけど。
安藤 私はお金を払ったつもりはないんですが、だから限られた人にしか配布されていないんですね。
藤田 はい、学生の多い地域には少し配布されています。
安藤 そうですか。だからそういうのが入ってくればかなり違いますね。これには地域でこういうことがありますと書いてあります。大体週に一回発行されていますから。
藤田 このあいだ話題になった「ミューズ」なんかも、多分情報として知った人も多いと思うんです。活字情報として知り得る情報は多いと思うんですが、入っていない地域が多い。

情報は地域とのパイプ役

安藤 ちょっと聞いてみるけれど、「サインプレス」、ああいうのは入っていないんですか。あれは大体週に一回ぐらい入るんですが。
藤田 私は西条中央に住んでいるので入りますが、郷曾とか田口には入らないと聞きました。

安藤 全員のところに届くわけではなく、最近藤田 部数が限られていまして、最近

藤田 それと、新聞が全然充実していないんです、東広島は。
越智 中国新聞なんかには東広島版がありますよ。
齋藤 あるんですが、広島版に比べたらちょっと。
越智 中国新聞に東広島版を充実してくれとお願いしますか。

兒玉 とりあえず広島大学担当が置かれていて、どこまで学生に関係したものが載せられるかはデスクとの関係があるようなんですが、一応強化はしているようなんです。要するに、中国新聞として学生に学内のことを教えようという姿勢が記者にはありますね。
でも、学生は新聞情報をどの程度利用しているのかどうか。新聞を読まない学生が多いのではないのでしょうか。
齋藤 学生の方の姿勢に問題があると。
越智 地方と言われるところに住んでいて、住んでいるところのことがわからないというのはいか変ですね。むしろ都会にいればそういう情報が得にくくて、例えば疎外されたような環境にあるなんていうことも言われます。地方では別にそういうことはないといわれますが、そういうこともあるわけなんです。

大学発の情報発信

藤田 情報のことにはなるんですが、大学として地域に発信していくのは、「大フォーラム」とか、そういうふうな広報活動を通じてのほかに活動しているんですか。

越智 情報としてまとまったものは「大フォーラム」ぐらいですね。
藤田 「フォーラム」は地域には配られていないんですか。

越智 本当にそれは少ないんです。例えば市の広報担当課にも行っていますし、中国新聞の方にも行っていますし、それからモニターというかたちで、本当に何人かというぐらいですが、行っていることは行っている。ただそうしたいんですが、これは予算の問題もありますから。例えばフェニックスフェスタのときに、たくさん刷りたいために実はページ数を随分抑えて、薄っぺらくして刷ったんです。

ですからたくさん出したいんだけど、別の制約があつてなかなかうまく機能していない。本当は出せばいいんですが、駅の方にボンと置いておけばいいんですがね。
齋藤 私もここに三年住んでいますが、今家庭教師をしているんです。それで地域の方と話したりすることもありますが、やっぱりフェニックスフェスタですとか移転完了記念行事のときには、そういうチラシとかを持っていらして、大学でこういうことを研究されているとかということはずごく興味があるからやっぱり行ってみたいんだ、とか子どもたちも言っているような感じなんです。

地域の方はやっぱり、広島大学がある都市ですから、そういう関心はすごく示していると思うんです。でも学生は示しているかと言ったら、そうではなくて、大学と学生が一緒になつてそ



齋藤 昌子 (さいとう・まさこ)
(学部・学科) 工学部第四類 (建設系) 三年
(出身) 岡山県笠岡市
(趣味) 美術鑑賞
(将来の希望進路) 建築家

ういうふうな活動を行える場所がとれたら、地域の人もまた交流ができるのではないかと。また情報も交換できるような場所ができるのではないかと思っています。

越智 さっきのパイプの話になるわけですね。それこそ「フォーラム」「広場」と言ってますか、そういう「フォーラム」があればいいですね。

安藤 この前広報委員会で話をしたんですが、例えばホームページだとか、ああいうかたちで大学から発信していくとか、そういうことであれば、ホームページが読める人は読めるわけですね。

越智 それは限られた人でしょうね。大学の中でもインターネットなんて知らないという人がいるんじゃないでしょうか。住民の方よりも、むしろ随分遠くの研究者とかそういうところに情報は行くでしょうけれど、周りには行かないんじゃないでしょうか。ああいうネットワークは難しいです。

安藤 どちらにしても情報は重視して、パイプを置くというのはこれからの課題ですね。

越智 ただどういうかたちでそれを実現するかということでしょうね。

じですね。どうもご指摘ありがとうございます。西条で今非常に不足しているのは、一つは情報である。その情報を片方は市の方に少しプレッシャーをかけた上で、向こうの方から学生の方に地域の情報をかなりたくさん送って、くれというふうな動きをしてみます。それからあとは、大学の方から積極的に地域に対して情報を発信する、それも取り組まなければいけない。具体的にどうすればいいかということについて何かアイデアがありましたら言ってください。

活用したいケーブルテレビ

北村 近々東広島市に、地域限定ですが「東広島ケーブルテレビ」というのができるそうで、多分サークルを紹介する枠というのをつくれるのではないかといいことで、もし参加したいサークルがあれば言ってくれというように話も出たことがあります。

ただこれがやるとこれから始まるという話ですし、エリアも、駅前から広げていくという段階だそうなので、先の話になるのではないかと思います。

が。そういうメディアがあるんですから、有効に活用していったらいいんじゃないか。

安藤 初期の段階からこれに食い込んでいけばいいですね。地域と一緒になっ

学生生活のオアシスとしてのサークル活動

児玉 サークルをやっている人への質問ですが、今は練習場が確保されるようになったのですか。

藤田 ちょうど移転のときにかかったんですが、サークルを移すのもこちらの機能が充実するのを待って移したような状態なんです。

コンサートなども、学生会館とか限られた場所ではできないんです。地域交流ということで中央公民館でやっているんですが、広島市内で開くほどは集まっていただけじゃないですね。広島市内でやると友だちもきてくれないということが今度あります。

越智 公民館でやっても、東広島の市民があまりきていない。当面大きなものは広島でないとできないということですね。

藤田 そうですね。それには広報活動を強化しないといけないんですが、私たちがコンビニエンスストアとか学生が集まるようなところはずぐわかるんですが、地域の皆さんに見ていただく広報というのができないんです。

サークルとスポンサー

て、ケーブルテレビの中に入り込んでいく。

他にも何か、具体的なプロポーズというか、そういうものがありましたら教えていただきたい。

越智 例えば広島でいろんな公演や活動を行うときに、パンフレットなんかつくりますね。広告費をとって、店の名前とかを印刷したりしていました。現在でもやっぱり同じようなやり方をしていらっしゃるんですか。

藤田 今は広島市のスポンサーもあって、東広島市のスポンサーもあって、両方から集めるようにしているんです。

越智 東千田のころは、そういうスポンサーになってもうということによって、同時に広報の効果もねらっていたというところがあつたと思うんですが。スポンサーになってくれるお店とか企業というのは多いんですか。

藤田 実際スポンサーといっても、紙面のこのカットでいくら、という値段を出していただくだけなので、実際はこちらが頼み込んで、お願いしますというかたちで、以前からのつながりや大事にする、それぐらいでしか集められない状態です。広島市のスポンサーから、もうこちらに移ってしまっただけじゃないか、と言われるときもあります。

越智 広告料は減っているわけですね、現実問題として。

藤田 そうですね、かなり苦しいと聞

きました。サークル活動も限定される。こちらのキャンパスに移ることは、サークル活動にかなりの犠牲を払っているというのが現状なんです。改善策がまだ出されていない。これから、サークル活動をしていく上での不安な点や不満な点が出てくるでしょう。

越智 今おっしゃったのは、だからサークル活動をずっと継続してやるためのいわばインフラみたいなものが、決定的に広島と比べて足りないということでしたね。ほかには何か。例えば合唱をするにしても場所がない、公演をするにしても広島と比較できるほどの場所がない。要するに設備がないということですね。それ以外にはマイナスの要因として。

藤田 サークル活動に限らず、大学の中で活動していることが大学内のことだけで、地域の人に発表できない。

齋藤 さっき広告の話があつたんですが、そのとき思ったことがあるんです。私たちのサークルでは、前から西条と東千田の両方でスポンサーをとっていたんです。昔なじみというのがありました。しかし、西条で広告をとるのも難しい状況で、ガソリンスタンドとかあらゆるところを回ったりして集めるような状況だったんです。西条に移ると企業も少ないし、時期が集中してしまうと、どうしても昔なじみのサークルとか大学祭実行委員会とかの方でどんどん行ってしまつて、できたてのサークルとか、これからがんばっていく、伸びていくというサークルがスポンサーがとれなくて、活動しにく



なくなってしまうんです。

大学も所詮お役所か

藤田 大学側にいろいろ要望書を出したりしているんです、サークルで。でも、なかなか回答がおりてくるのが遅いんです。

安藤 学生課を通してですね。

藤田 いろんなところを通してです。いろんな方面からアプローチしていると思うんですが。

学生課だけではなくて、例えば直接学部の事務局なんかに要望を出したりするときもあるんです。でもなかなか、サークル活動に大学側があまり援助してくれないというか、改善策に関して、こちらに提示してくれる部分が少なくなっているんです、それでサークル活動が限定されているように感じます。

北村 こういう言い方をするのはちょっと気がひけますが、本当に要望とか出した場合、僕が話に聞いたのは、基本的に学生課を経由して要望を出すということですが、そちらに提出しても、さつき言われたように答えがなかなか返ってこない。あるいは答えが返ってきてても、典型的なお役所である。大学も所詮お役所か、みたいな不満が出てきて、本当に見ている気分もよくないんです。「それについてはさらに検討したい」とか、そういう回答がほとんどのようなので。

だろうと思うんです。でも大学は、サークルとかそういうものが充実しなければ学生生活がうまくいかないの、今からはそちらの方に力を入れてやってほしいということですね。

早急なインフラ整備を

北村 話題がそれてしましますが、移転が忙しかったというのは、つまり大学が優先したのは、建物的な、構造的な美観の方ではないかとつくづく感じているところなんです。結局みんな移転してきて何が困っているかというと、駐輪場がないとか、いまは空き地がみんないますが、結局舗装もきれいなまままで雨が降ったらどろどろになるという、そういう実用面が後回しになつたな、という印象が強いんです。

安藤 駐輪場というのは今屋根がないんですか。

北村 今屋根を順次つけていたいただいて、それは非常にありがたいんですが、全体的に数が少ないというか、計画の段階で建物をつくって、美しいものをつくって、その後空いたところに駐輪場をつくったという印象が残ってしまうわけです。数が足りないという現実を見ると。

安藤 駐輪場と駐車場もそうですね。

北村 自分の観点から駐輪場と言ってしまうんですが、本当に足りないのは駐車場だろうと思うんです。

藤田 広島大学は入れ物だけで成り立っているのか、と言って、「入れ物大

学」と言われていますけれど、越智 そんなこともあるんですか。

見えない学生街構想

藤田 実際この環境は地域とは切り離された場所にありますので。特に今日その話が出ると思ってきましたが、下見学生街の件です。あれも実際はこうしてほしいといった要望を大学の方から出されているんですか。

越智 話し合いの場はあります。学園都市づくり交流会議とかありますね。そんな中に学生は入っていないかもしれませんが、多分商店街の人とか商工会議所の人とか、そういう人たちとのあいだの交流はあるはず。ただ、僕らが見ているとよくわからないんです。

藤田 見えない学生街構想。
越智 学生の方は学生の方で町内会の人たちと、話し合いの場を持っているんじゃないでしょうか。

北村 学生街の話は今日、藤田さんと同じように、出るだろうなと思ったんです。

結局、学生街をつくってそこに店ができるということは、そこに店出るのは大なり小なり、企業ですね。そういうところをお願いして、学生街というのをこの近くにつくってもらうにしても、現実的にここに寄ってくるお客さんというのは広大生とその関係者。もちろん僕らの観点から見たら、学生が一人人もいる大学というのはとても大きいように感じますし、実際に学生

藤田 学生も押し込められただけ、教員、教授の方々も押し込められただけ。

数だけとってみても、国立の中では有数の規模だとは思いますが、出店してくる方から見ると、はたしてそれが出店するだけのメリットがあるのかどうか。学生しかいないということは、延べのお客さんは限定されますから、黒字が出せるかどうか。黒字が出せなければ、出店してくる価値はないですから。赤字が見えていたら出店してくるはずはないです。

そこに学生街ができたことによって、地域の人が広大に向かってやってくる、どんな広大に向かって東広島市民以外の方も、地域の方も、大勢の方がきていただけるような環境というのがあれば、下見学生街という構想もかなり加速されるのではないかと思うんです。下見学生街というのは、学生の方がどうこうというだけでは、おそらく完全には実現しないと思います。学生だけというのは、考えてみたら、一人はすごいですが、逆に言えばたかが一人。

安藤 だけど、そのところの損得というか、赤字が出るか黒字が出るかというのには企業が判断してくるわけですから。

中川 もちろんそうですね。その一人人というのを、企業の方がどう判断されるのか僕はわかりませんが、限界が、

とりあえず、少なくとも学生とその関係者という条件が見えてしまっているんですね、今の段階ですと。

安藤 それは企業が判断することで学から。それよりも、学生、あるいは大学としてできることは、やはり下見学生街にどういふものができてほしいとか、そういった希望を出すことです。そういうアプローチをすれば、それを企業が有益になると判断すればできることであって、こちらで「私たちは人数が少ないから企業に情報を出しても仕方がない」というのでは、ちょっと悲観的というか。

確かに僕たちの希望が通るかどうかはわからないですが、学生たちのニーズをどうやって地域の人たちに知らせるかということだと思ふし、そういう努力をする必要があるんじゃないか、という気がします。

北村 本当に、今言われたのは非常に痛いことを言われちゃった、というのはあります。言い訳めいたことになりませんが、何が言いたかったかと言うと、本当に大学の方で、地域の方が参加してこられるだけのいろいろなアイデアがあれば人が増えますから、それでまた学生の要望を後押しするかたちにもなってくれていいんじゃないかと。そちらの方が建設的でした、言い方としては。

安藤 私もそう思う。だから今は何もないからどうしようもないけれども、あそこには何か核をつくって、そこに学生街とかファッションモールだとか、そういうかたちの若々しい、あるいは



目新しい町を一本つくればいいんです。一本つくったら、その回りに人が寄ってくる。寄ってくればまたもつとつと拡大していく。多分そういうかたちをとるしかないと思うんです。

今はどういふ格好をつくるか、どういふものを中心に持ってくるか、それを持ってきて、それからあと、学生としてはこういう要望を出し、地域としてはこういうふうな要望を出して、それをつなぎあわせていくと、もつともつと膨らんでくると思うんです。だから、最初考えた以上に膨らむことを期待したいと思います。

藤田 その膨らませるための目標というものが、あまり明確ではないように思うんです。今の東広島市の拡大の仕方、随分アンバランスというか、目につくところからの開発みたいで、先に見える構想がないんです。下見学生街構想と名前がついてから、実際どれくらい目標があるのかと言ったら、学生からしたら無いように見えるし、大学側もそれに関与していないように見える。

これからの東広島市の発展を考えていく上では、すごいデメリットの面だと思わぬです。

安藤 それをこちらから出すことを、待っていると言ったらおかしいけれども、困っているんじゃないか、東広島の方としては。ないんだったらこっちから出せばいいんじゃないか。大学の方から要望を出していく。だから生協の「ミュージズ」が何か言い始めた。そうしたらそれに対して青年会議所とか

がついてきて、一緒にやりましょうというふうな動き始めているというのは、やはりこちらの意見が通るときには通る、というのはへんない方ですが、要望、あるいは私たちのイメージというものを彼らは必要としているんじゃないですか。

下見学生街に望むこと

下見学生街に関して、大学あるいは学生として望むことはどんなことでしょうか。

まず希望を出して、それからあとは大学を窓口にして、商工会議所とか地域の人たちと具体的に交渉していくかたちになると思うんです。

ただどこをどうしては夢というのか、こうあってほしいというふうなものを出さなければ設計図は書けないだろうと思いますから、まずそういうものを出してみたいと思いますけれど、どうでしょう。もう写真真で、現実離れしていてもかまわないと思います。それを、企業の人たちが実際にやってくれると思います。こちらとしてはアイディアというか、要望を出せばいいんじゃないかと思わぬです。

何でもいい、下見学生街にあれだけのスペースがある。あれを自分に任されている、何でも使っていいたいと言われる。

中川 まずあの下見の道の狭さをどうにかしてほしいです。あれは正直こわいですから。自転車もこわい、お互いにこわい思いをしています。あそこは

自分を守る術

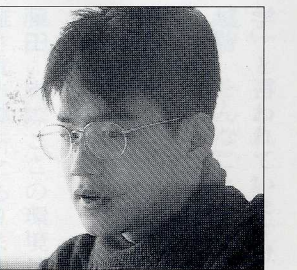
藤田 東広島市は治安がいいところと聞いてきたんですが、学生の人数が増えるにつれて、そういった人も増えてくるんですね。

越智 結構身近にもそういう話をよく聞きますか。表に出る話というのは少ないはずなんです。本当に氷山の一角であって、そういう話が出たということとは、かなり潜在的にもあるということだと思わぬです。

黒仁田 人家が少ないということ、余計にそうだといいことですね。

越智 例えば女性が痴漢にあうという話はよくありますが、僕が最近聞いた話では、男の人が、これは痴漢じゃないかと暴漢と言った方がいいのかもしれない。夜自転車、やっぱり鏡山の近くですが、通っていたら囲まれたという話を聞きました。それは大学院生ですけれど。

兒玉 道路を抜けていくという環境整備という面を進めていくだけでなく、自己防衛と言いますか、自分を守る術を身につけてほしいと思います。犯罪というのは都市の方が多いわけ



中川 昇 (なががわ・のぼる) (学部・学科) 総合科学部・総合科学科四年 (出身) 広島県広島市 (趣味) 行事ごと、集団行動 (進路) N T T (一言) 大学・学生それぞれに出来ることをそれぞれが行っていけば、住みにくいという事はなくなるはず!!

本日に夜というか、夕方五時〜六時には通りたくないです。朝の八時半とか九時とかもそうです。とにかく自転車の交通量がすごいです。

普通の手で走って、対向車がきたらもうお手上げという感じです。とりあえず停まって、一台だけならいいんですが、反対車線から何台もきているときは進むに進めないという現状で、あそこは本当にこわいというのが実感です。

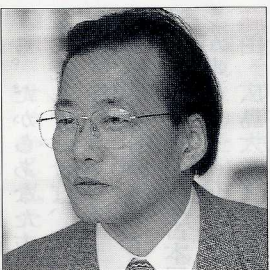
「明」の「暗」

越智 夜は暗くて危ないということをする人もいますが、今は明るいですか。本山 暗いです。下見街道はほとんど街灯がないんですから。

中川 一度そういう話があったですね、電灯をつけるのか。たんぼを持っていく方から苦情が出たから中止になったとか。詳しいことはわからないんですが、そういう話があったということですね。

安藤 苦情というのはどういふ苦情。たんぼに影響があるということですか。藤田 苗を植えた時期ぐらいにちょうど新入生が入ってくる時期なんです。よく飛び込むんです。

安藤 何が飛び込むの。



兒玉 憲一 (こだま・けんいち) 保健管理センター助教・臨床心理士 昭和五十年三月 広島大学大学院教育学研究科 博士課程前期修了 [専門] HIV/AIDS カウンセリングにおける カウンセラー養成方法に関する研究

ですが、今まで少なかった人口が急増して、大学の中であろうが外であろうが、犯罪といったものが増えてきますね。郊外の大学だから犯罪が少ないというふうな予断と偏見を持たないように。自分を守る術というものをしっかりと身につけてほしいと思います。特に、僕も二年間こちらで暮らしていて、何度も側溝に落ちまして、肩を痛めたり、いろいろなことをしました。

越智 それは普通の状態ですか。兒玉 いや、夜は暗いでしょう。自転車に乗っていて側溝に落ちたこともあります。周りに聞くとみんなあるって言うんです。

それで、動物的勘を復活させないといけない。都市部で明るくて守られていた中から、そうではないところへきたという認識をやっぱり持つ必要がありますね。環境が整っていないが、その環境で生きていく上での術というのを身につけてほしい。

それとやっぱり女子学生は無防備すぎる。そこらの油断はやっぱりできない。越智 先生、お仕事柄というのはおかしいんですが、そういう苦情とか、いろんな意見なんているのはだんだん増えていくわけですか。犯罪とかそういう

藤田 道路があまりにも狭いために、ハンドルをちょっと切ったら車が飛び出すんです。それでたんぼの方に大損害を与えたことが何度もあるので、道路を抜きたいというこちらの要望と、向こうの要望が一致したんです。それで抜けるためには、街灯をつけていたら、どうせ抜げるんだからということ、抜げるのを待ってから街灯をつけるということですね。

安藤 とにかく道を広くして街灯をつけられれば、一応そういう交通の問題は解決する。

藤田 そうですね。北村 少なくとも今よりは改善されるのではないかと思います。

越智 ちょっと話がそれるかもしれないませんが、電灯がなければ危ないとか、そういうことはありませんか。大学周辺で、例えば私はバスで通っているの、バスストップを利用するんですが、暗いときには女の子がきません。僕らが行きますでしよう、そうするとどこからかやってくる。一人では危ないということなんです。先ほど鏡山がともいいところだという話がありましたね。最近何か物騒なことが起こった

うネガティブなものに関する話というのは、保健管理センターの周りで。兒玉 東千田のころもありましたし、こちらでもある。人がいれば必ず性的な犯罪はあります。やっぱり一人暮らしをしている以上は、そういうことに対するしつかりとした自己防衛をしていただきたいと思わぬです。暗いところで女子学生が歩いているのを見ると、寄り添ってあげようかと思わぬですけど、誤解されるのも困ります。この点は、もともとこの企画は新入生に対するアドバイスですから、大事なポイントですね。性に関して言えば、やっぱり不本意な妊娠の問題があります。男性も女性も気をつけてほしい問題ですね。安藤 貴重な助言をありがとうございます。新入生にぜひ伝えておかなければいけないですね。下見学生街についてはもうこれぐらいで、これぐらいで、まだ何も出ていないか。兒玉 おそらく皆さんがいらっしやるあいだには実現しないと思うんですが、後輩に残しておくということですね。ものができたらいいかということですね。



本山 和寿 (もとやま・かずとし) (学部・学科) 学校教育学部・小学校教員養成課程 美術領域三年 (出身) 熊本県玉名郡長洲町 (趣味) 美術に関すること (将来の希望進路) 小学校教員

りしていませんでしよう。下見の方はそういうことはありませんか。夏は痴漢が出て、冬は変態が出るとか。本山 僕は一回、冗談ですが、同じ研究室の友だちから「あんたじゃないの」と言われました。眼鏡をかけて背が高かったと。でも堂々と大学内に入りますますから。

越智 それは学生じゃなくて。本山 それかわからないんです。大学というのは学生以外の人が歩いていて、先生かなと思うし。制作とかやっていて遅くなると、女の人は帰れないみたいなところがあるんです。

藤田 開かれた大学なんですけど、開けすぎてしまったということですね。北村 大学の中だけなら東千田町も夜はこわかったです。特に旧理学部のあたりは。

越智 これは大学の中をもう少し街灯を増やして明るくすればなんとかなる問題ですか。中川 どうなんでしょう。大学の周りの道は結構暗いですが、学内に入ってしまうと、案外明るいところが多いなと僕は個人的に思っている。結構照明がついていますしね、キャンパス内に。

知的刺激にあふれたホールを

齋藤 先ほど藤田さんの話でもありましたが、サークルが活動するところがやっぱり不足するということがあります。

下見学生街に何がほしいかと言われて、娯楽施設とかはみんな浮かぶと思うんですが、私がほしいなと思うのは、大学が地域に向けて情報を発信するよきな文化施設みたいな感じのものです。それから広島大学の学生がたくさんいて、知的刺激を受けたいと願っている大学生もいっぱいいると思うんです。そういう、芸術的なものとか文化的な催し物ができるような総合的な会場ですとか、そういうものを備えた学生街がほしいなと思います。

安藤 催し物のできる施設ですね。ただそれは学生街でなくても、大学の中心にホールをつくるのか、そういうことも解消できるわけですか。それとも下見学生街とか、地域の中の方が場所としていいわけですか。

齋藤 やっぱり大学の中にホールがあるのとは違いますね。

藤田 地域との交流ができます。安藤 ホールをつくるのであれば、それは地域の中に出せということですね。越智 ああ、なるほど。要するに行政側に対する希望というかたちですね。

齋藤 これからの学生街というのは、大学がつくるものでもないし市がつくるものでもないし、学生が願ってそのままつくられるものでもないと思うんです。

す。そういう意味でいろいろ構想を練りながら、徐々に進めていかなければいけないものだと思うのです。

安藤 誰かが言わないと進まないですから。

齋藤 そうですね。こういう座談会の場はすごく貴重だと思いますし、これだけの人数でもこれだけ意見が出るんですから、広大生はいろいろなことをもって考えていると思うんです。

学生街と古本屋

北村 今の話から何かスケールを落としてしまうような気がするんですが、こつちから発信、情報を出すというところだけではなくて、地域の情報のほかにも当然、書物の上での情報というのが、学生としては当然欲しいと思うんです。

僕は図書館によく行くと言いましたけれども、それだけではなくて、大学があつたらどうしても近くに欲しいと思うのが古本屋なんです。学生の財布からはそんなに本も買えないですし、図書館で読もうにも、もちろん同じ本がそう何冊もあるわけではないし、誰かが借りていたら読めなかつたりすることがありますから、書物から情報を得るといえるのは、地域の情報やテレビとかラジオから得られる情報とは別の情報が得られると思うんです。情報だけではないで、何か好奇心をかきたてられるようなものとか。これという社会的な情報でなくても、小説を読むから読むで、自分の中に何か啓発される

ものが持てるのが書物だと思っんです。

越智 古本屋に来てほしいというのはこれは難しいでしょう。

北村 本場に難しいでしょう。多分一番実現が難しいんだと思います。

越智 僕も不思議だっただけです。例えば東千田に「神鳥」書店といつてなかなかいい古本屋があるのに、来ないでしょう。多分、ここでは商売ができないからです。広島だったら買う人がいるんだだけ、この近くだったら多分買う人はいないだろうということでしょう。

北村 この周りを見ていたら、多分本屋ができて、どうしても経営は成り立つていかないかな、と思います。

越智 かつては大学の周りにいたら必ず経営は成り立っていたんでしょけれど、今は本当に書物が重要なメディアではなくたという変な時代ですから。だからあなた方がそれこそどんな読んでいけば、本屋も来ると思えますけれど。

安藤 私たちのイメージとしてはやっぱり、大学があれば古本屋というイメージがありますよね。

藤田 広島大学は新しいものばかりに

今その学生の意識の改革が必要だと言われましたが、これは具体的に言ったらどういうことになるわけですか。

大学に安心感

藤田 せっかく私たちが三年前四年前に入学したときの気持ちと、今、学生生活を送っている気持ちというのは一緒じゃないですね。ある意味では低下、退化だと思っんです。だから、入ったときの気持ちを貫けるような周りの環境を整えることが、大学ができることだと思っんです。

それが体制の改革であれば、それはいいと思っんですが、具体的に難しいんですけど、やはりさつきも出ましたけれど、受け入れる体制を整えるというのが一つ。あと大学が持つ核とか、一つの柱みたいなものがあつて、それについていけるような、安心してついていけるようなものが必要ということ。

中川 学生の意識の改革というのは、話を聞かない人に話を聞けというふうなものだと思っんですが、でも僕もそういうことは思っっていて、入学当初は「私はこれを勉強してきたんだ」というのが、「今週一回しか授業に行っていないぞ」と自慢するような、これが自慢になつていっんです。

よく学生が小宇宙を形成しているんだとか言いますよね。本当に周りのごく一部の、自分の周りの四五人しか交流がない。そこで、帰ってみんなゲームをしたりだとか、本当に内輪だけで楽しんでしまうというよう

千田・フェニックス落日



目が向いているんですが、あとについてくるものがないんです。だから私たちが勉強した書物が下の学生に回って、下の新入生が持っている本はいかにも手垢のついた古い本だったということがないんです。先生方にとってはその方がいいんでしょうけれど。

でもそういった一冊の本を何人もが共用するというのが当たり前のこととが、今の学生は本を買わないからコピーをする。それで、大学改革としての一つに、学生の意識の改革のことを話し合うべきでは、と思っんです。越智 それはおもしろい、どういうことですか。

な状況。あとうちの総合科学部なんかで、スペイン広場って言うんですか、あそここの掃除とかも何度かやるんですが、ああいうのは全然知らないし、知っていても行かないんです。行く人というのは大体四年生とあと院生、要するに研究室の先生に行くとやられて行くような感じで、本当に一年生、二年生、三年生というのは全然行っないです。自分の周りの楽しいこととかそういうことばかりに目を向けていて、学部全体での行事、もしくは大学といった、そういう行事にも本当に目を向けていないのが現状だ。

だからといって愚痴ばかり言ってもしょうがないわけで、ではどうするか、ということなんです。やっぱり情報公開というのももちろんあると思います。もつと全員で何かをするというふうな、一人一人に刺激ですか、そういうものが必要だと思っんです。西条に移転して、最初のころよく言われていたのが、西条にきてやることがないから、仕様がなから友だち同士内輪で固まって、家で集まって飲んだりしているんだとかいうことです。もつと学生が活動する場面とか、集団で、みんなで行動するような場面、そういうものをもつとつくってほしい。

こちらからもやるし、学生も、受け入れるばかりではなくて自分からそういったものを持っていけば、すべてにおいてうまくいくと思っんです。そういう意識にしても、学校の勉強に対する意識にしても。

学生の意識改革

藤田 大学側は大学改革というときに、大学内の組織の改善を行うのを主流としていっすね。教授の授業方法の改善などそういうような目先にとらわれていっますが、実際に大学を機能させているのは教員、先生方と学生ですから、その学生が大学についてこなければ、せっかくの大学もただの名前で終わっってしまうと思っんです。

越智 教師の方が学生の意識を変えなければ、なんて言うのと、必ず反発を受けるわけなんです。しかし、学生の方からそういう声が出るというのは非常におもしろいな、と思って聞いていたんですが、大学が今取り組んでいるのは、むしろ教官の意識です。この意識改革をしなればいけないということをもつと強調していっすね。





フェニックスと月

大学に関心を持ってない学生

だから、大学に関心がない、もしくは学部に関心がないというのがすごく多いと思うんです。まず学部での、各学部、医学部なんかは自治会のようなものがありますね。そういうのは総合科学部などでは確立していないんです。そこで、まず各学部でそれぞれがもつと情報の行き届くような、一年生から四年生までもしくは院生という縦のつながり、連絡網ですか、そういうものをまず確立して、そういう大学もしくは学部で何が行われているかということに、一人一人もつと関心を持たせることから始めていきたいと思うんです。

越智 なぜ関心がなくなったんですか。新入生のときには、自分のやらなければいけない勉強のイメージもかなり明確だったんだらうし、大学でこういうふうにしよという、そういう思いも強かったんでしようけれども、それが徐々になくなってきたとおっしゃいましたね。

その原因というものは一つではないんでしようけれども、例えば、中川さんはどういふふうにしていらっしゃるんですか。

中川 僕は集団心理というか、そういうことが多いと思うんです。僕は勉強したいんだけど周りの人はしてないし、周りの人は僕が勉強しないことを期待しているんじゃないかというふうな、変な錯覚を持つ人がいる。

だからテストがあったときに、本当は勉強したいんだけど、周りのみんなも「さぼろうぜ」と言うからさぼってしまうとか。そういう周りに流されるというのがすごく大きいと思うんです。今、本当に真面目であるよりも不真面目である方がいられるような、そういう何かおかしい状況というのがあると思うので、それがまずおかしいなと。もつと自分のやりたいことはやっていたい、正しいと思うことは正しいと言えるようになることが、まず必要だなと思います。そう言ったからといって直るといふのもないですけど。

安藤 ある意味では、だから集団の行動をとっているわけか。
中川 そうですね。個人を主張するのはなしに。

外部からの刺激と個人の行動力

北村 何か悪い意味の集団というか。

今話を聞いていて思ったんですが、今こうやって僕らが大学に入ってくるまで、大体十八年、十九年過ごしてきた、自分で何かを決めて自分でちゃんとそれをやるという経験が非常に少ないんじゃないかと思うんです。僕自身もそうなんですが、自分でちゃんと決めてこれはやるよとか、そういうような方向で動いてきた経験というのはみんなすごく少ないんじゃないかと思うんです。それで集団という言葉に対して、何か錯覚的にみんなと一緒に動けばいいんじゃないかという、そういうふうな変な錯覚を持ってしまつて落ちた先が、

今話に出たようなことだと思っんです。
中川 そのためには当然自覚を持たせることが必要であつて、もつともつと外部からの刺激というのがあれば、まだ変わるんじゃないかと思ひます。

あとやっぱり、個人個人の行動力というか、例えば駐車場にしても、文句を言う人は多いですが、実際にどれぐらい足りないのか、そういったことも実際どういふ状況か調べればわかることだし、なぜ駐車場が足りないのかということも、知らなければ改善策は当然出ない。でもそういったことを調べずに、ただ駐車場がないとぶつぶつ文句ばかり言っている。文句というのも正当なちゃんとしたところに言うのではなくて、ただ言っているというのだから。文句ばかり言うのではなくて、じゃあこの状況でどうするかということとを、みんなにもつと考えてもらいたい。こんな言い方をすると何様だとなるんですが、本当に、何かを思つてまづ動けるというのが必要だと思ひます。

あと、各学部にあると思うんですが、学生の窓口みたいな感じの部署がありますね。例えば学生課のような。総合科学部では学生係がありますし、あと総合科学部の場合、学生小委員会というのがある、そこが窓口になつているんです。

でもそういうのを知らないから、利用の仕様がなと思うので、もう少し現在の組織がどういふふうになつていっているのか、例えばこういうニーズがあつたらどこに言えばいいとか、そういうことがもう少し明確になつていけば、学生の活動の範囲も広がると思ひます。また刺激にもなるという気がします。

安藤 一つは新一年生に対してそういうフロアチャートというか、組織づくりというのを一つ出してあげばいいですね。それぞれの学部がうちの学部はこういうシステムで意見を吸い上げていっていますよ、と。そういうものがあつたら次に、こういう文句はここに持つていけばいいな、というのがわかりますね。

大学の中の学生の位置づけ

安藤 つまり学生が、大学のシステムという組織の中でどういふ位置づけにあるかということを見ることができるといいですね。

北村 そういうものがわかつた方がいかもしれない。学部長が決まるときでも、決まつたあとで学生が知るといふのが現状です。なんて言いますか、学部長の選挙があるとかそういうことも知らないわけですね。

中川 どういふふうに動いていますよというのがはつきりしない。噂のレベルで、この教授とこの教授が喧嘩しているとか。

喧嘩は公表できないにしても、本当に最初からの流れという中にも、正式な情報としてはあまり流れていないんじゃないか。

ほかの話でもそうですね。学校で今どんなことがあるか。大学に入るときの話でも、果たしてどれぐらい知っているか。

越智 だから皆さんには、言葉は悪いかもしれないけれど、仲間はそれに置かれていっている意識が多少なりともあるわけですね。それは本当になくしていかなければいけないですね。

中川 確かに学生にも問題があると思ひます。ですけど本当に、ちよつとしたきつかけがあれば、相乗効果でどんどん変わつていけると思ひます。

藤田 大学に魅力があつたらいいと思ひます。

まづ持っているキャンパスというのが、キャンパスの持つ魅力だと思ひます。

越智 逆に言えば、それだけの魅力が今見出せないということですね。

北村 大学の魅力というのが、広大に限った話ではないんですが、受験生に対して、大学が最初に見せてくる魅力というのは、どこの大学でも、紹介パンフレットとか見てもそんなものだと思うんですが、例えばうちだったら西図書館あたりから見たスペイン広場の風景の写真とかが表にくるんです、ハイ下面が。

信頼できる人間関係を

児玉 やはり広島からこちらへ来て、大学外部のいろんな人たちとの交流というものがなくなつたために、学内で人間関係をつくることの意味を見直さなければいけなくなつたわけです。

学内のフォーマルグループと言いますか、教室、あるいは研究室で、縦の関係も含めてグループをつくっていくとか、伝統的なサークル活動だけではなくて、気の合った者同士でやりたいことをやるというようなことが、広島時代よりさらに必要なんです。

ご存じのように、われわれの大学は、今年ももう五人自殺者を出していて、事故死も含めれば毎年十一人以上の学生が死んでいます。このような状況の中で、大学の中で何が大切かと言うと、僕は信頼できる人間関係に尽きるだろうと思います。

広島時代にはすでに広島という都市機能の中にあり、大学があえて求めていかなくてもすんでいたことが、こちらでは大学の内でも外でも欠如しているんだということを、特に教官に意識してもらふことです。

欠落しているからには、大学の中で補完していかなければいけないという意識改革が必要だろうと思います。教官が一人ひとりの学生について、ちゃんと誰かとつながっているかに心配りをしていくことが、非常に大事なことなんです。

ゼミの中の学生とこの実感

本山 三年生になつたら、初めて大学生だなという実感がうんと加わつてきて、六時半ぐらいから座談会みたいなのを、もう四回目ぐらいなんですが開いているんです。美術教育のゼミなので、もちろん話題は美術教育に関することなんです。学生がまずそれを主催して、研究室に貼り出すんです。一年生も二年生も三年生も四年生もみんな大体二時間か三時間ぐらいずつ話し込むんです。

若元先生が場所を提供してくれて、コーヒーやお菓子やら出してきて、最後に、話し合ったことを、機関誌じゃないんですが、「あまぼう」という月刊誌として出しているんです。そうやって自分たちがゼロから考え出してつくつたものを出してみたら、初めて僕はこの学科の学生になつたんだな、という気がしたんです。

越智 それには教官は全員出るんですか。本山 いえ、教官は一人も出ないんです。越智 出ないんですか。本山 学生が問題を提示するんです。まずこれについて考えようか、ということとそれを貼り出して、それに関心のある人は、一年でも二年でも三年でも来るんです。一、二年生というのは、来てほっとんど聞かれないんです。

越智 三年生と四年生が大体話をしているんですが、本当に時間を忘れるぐらい話して、もうバスの時間がないというぐらい話して、その話したことを企画した

の読書会。中川 それは決まった人ではなくて、公募しているんです。「勉強会をやっています、今度のテーマは何です」だから毎回回る人もいれば、興味のあるテーマのときに顔を出す人とか、そういう感じでしょうか。越智 一つの手掛かりみたいなのができた。

時間がなくて、あとちょっと聞きたいことがあるんです。いいですか。この西条のキャンパスには、それでもいいところがあると思うんです。それは何だろうというのが一つ。それで、もし新入生に何かいいところを伝えたいと思うとき、それは何かを一つ聞きたい。何もなしというわけではないような気がするんです。

北村 新入生がほとんど参加するんです。しょうが、オリキャンはそんなに多くの大学にあるシステムではないように聞いています。オリキャンという催しは非常にいいんじゃないかと思えます。大学に入って、僕たちはオリキャンを経験して、そこでいきなりもう周りに知り合いができてしまいました。もしそれがなかった場合に、新入生が四月に入學して、二日、三日でいきなりそんなに多くの知り合いができるかと言うと、難しいと思います。

オリキャンは友だちづくりのきっかけ

中川 それは何人ぐらいでされるとおっしゃいましたか、そのゼミ、学生だけ

だか、そのゼミ、学生だけ

だか、そのゼミ、学生だけ



人が二日ぐらいかけて原稿に起こして、十ペーじぐらいになるんですが出すんです。

越智 ゼミのおかげだとおもうんですが、そういうことをしていると、初めて学生だな、というような気がして、既製授業と言うんですか、普通の授業で、先生が前の黒板に書いて、それを写して、テストのときにコピーして、悪いときはカンニングしてとか、一定の単位をどんどん揃えていくのが馬鹿らしくなってくる。それでうまく卒業したとしても、何があるのだろうかと思最近思いました。

北村 僕は、この中で一人だけ二年というところで、ゼミにまだ入ったことがない。僕の感想としても、大学へきて今まで、大きな教室で講義を聞くとい

大学にくるようなきつかけの重要なところだと思えます。越智 だから、これにはできるだけ参加してほしい。中川 オリキャンといたかたちでないにしても、全学での新入生歓迎の何か連絡団体があったらいいと思うんです。各学部でそれを拠点にするなり、そういうきつかけから何かが始まって、学部での活動というのをもっと活性化していける。そうすれば本当に、ゆくゆくは全学部のパイプラインがつかうと思うんです。

中川 僕ら喜びがあった。僕は苦労だとは思っていないですが、ただスタッフは大変です。うちの学部なんか特にスタッフの人数が多いんです。二年生中心に百何名といますから。スタッフとそうでないものという二つの視点があって、さらに教官があつて、問題も結構あるんです。でもそれを毎年毎年少しずつ改善をしていくんです。ただ、オリキャンをなくしてしまつたら、ほかのいろいろに、発表という意味も含めて、学生が活動するきつかけをなくしてしまうような、すぐくわいというふうになるんです。だから今、本当にいろいろ問題はあ

残して、そういった学生行事というのをどんどん活性化させていく必要があるな、と。中川 僕も、これは完全に個人でやっていることですが、勉強会とかやって、個人持ちでテーマを持って、「来週は誰々さんがどういうテーマでやります」と言つて勉強するんです。

安藤 それは今度の大学改革の目玉です。北村 そうですね、あれは本当に期待しています。中川 僕も、これは完全に個人でやっていることですが、勉強会とかやって、個人持ちでテーマを持って、「来週は誰々さんがどういうテーマでやります」と言つて勉強するんです。

残して、そういった学生行事というのをどんどん活性化させていく必要があるな、と。中川 僕も、これは完全に個人でやっていることですが、勉強会とかやって、個人持ちでテーマを持って、「来週は誰々さんがどういうテーマでやります」と言つて勉強するんです。

残して、そういった学生行事というのをどんどん活性化させていく必要があるな、と。中川 僕も、これは完全に個人でやっていることですが、勉強会とかやって、個人持ちでテーマを持って、「来週は誰々さんがどういうテーマでやります」と言つて勉強するんです。

う形の授業しか受けたことがない。今度やつとゼミに入れるということ、こつちからも何か意見を出していつて先生に教えていただく。そういう形式の授業が持てるというのは、非常に期待しています。

北村 平成九年度から、一年生にもゼミのようなものに触れる機会を与えてもらえるというのは、本当に僕にはありがたいことだと思つています。安藤 あれは今度の大学改革の目玉です。北村 そうですね、あれは本当に期待しています。

中川 僕も、これは完全に個人でやっていることですが、勉強会とかやって、個人持ちでテーマを持って、「来週は誰々さんがどういうテーマでやります」と言つて勉強するんです。

残して、そういった学生行事というのをどんどん活性化させていく必要があるな、と。中川 僕も、これは完全に個人でやっていることですが、勉強会とかやって、個人持ちでテーマを持って、「来週は誰々さんがどういうテーマでやります」と言つて勉強するんです。

残して、そういった学生行事というのをどんどん活性化させていく必要があるな、と。中川 僕も、これは完全に個人でやっていることですが、勉強会とかやって、個人持ちでテーマを持って、「来週は誰々さんがどういうテーマでやります」と言つて勉強するんです。

残して、そういった学生行事というのをどんどん活性化させていく必要があるな、と。中川 僕も、これは完全に個人でやっていることですが、勉強会とかやって、個人持ちでテーマを持って、「来週は誰々さんがどういうテーマでやります」と言つて勉強するんです。

残して、そういった学生行事というのをどんどん活性化させていく必要があるな、と。中川 僕も、これは完全に個人でやっていることですが、勉強会とかやって、個人持ちでテーマを持って、「来週は誰々さんがどういうテーマでやります」と言つて勉強するんです。

残して、そういった学生行事というのをどんどん活性化させていく必要があるな、と。中川 僕も、これは完全に個人でやっていることですが、勉強会とかやって、個人持ちでテーマを持って、「来週は誰々さんがどういうテーマでやります」と言つて勉強するんです。

残して、そういった学生行事というのをどんどん活性化させていく必要があるな、と。中川 僕も、これは完全に個人でやっていることですが、勉強会とかやって、個人持ちでテーマを持って、「来週は誰々さんがどういうテーマでやります」と言つて勉強するんです。



『心臓麻酔マニュアル』 第2版

監訳 弓削孟文

文・弓削孟文



心臓麻酔や大血管手術の麻酔は麻酔管理の中でも特殊な領域であるという感覚は、私たち麻酔科学を専門とする医師においてさへもある。

そして欧米の趨勢として、またわが国の流れとしても特殊な疾患は各疾患のセンターを国の中で設け、その医療機関で集中的に対応をするという分化の方向にある。

しかしながら現状は各施設において、各大学において開心術は行われており、緊急のCABG(冠動脈の狭窄部を他の血管で置換する手術)や大動脈瘤破裂の手術が飛び込んでくることは多い。このことは、心臓・大血管手術の麻酔管理はわが国の現状においては特殊な麻酔科医の知識や技術としてかたづけなくてはならない問題を含んでいることを意味している。

広島大学医学部附属病院は心臓・血管外科手術のみを行う特別な施設ではないし、私自身心臓外科麻酔の専門家ではない。

本書の翻訳を真興交易医書出版の橋内社長より依頼されたときは、実はかなり躊躇した。が、前述のような理由から、われわれ麻酔科医は自分自身の中で特殊な領域をつくってはならないと常日頃より考えている私は、私たちがのような心臓・血管手術麻酔の専門家ではないが臨床麻酔科医であるものが理解しやすい翻訳書を世に送ることは大きな意味があると考え、お引き受けした。


編集者のコーネル大学 Thomas 教授は米国における心臓外科麻酔の第一人者であり、本書は米国のレジデントのガイドブックとして有名な教科書である。私の恩師である Yale 大学の L.M. Kihata 教授のご紹介で本書の編集者の Thomas 教授からも激励のお言葉をいただいた。

本書は第二版であり、第一版は東京大学の稲田豊教授の監訳で心臓麻酔の専門家として有名な釘宮先生と森田先生のお二人により訳がなされている。今回は私たち広島大学のスタッフ全員で訳させていただいた。序において編集者の Thomas 教授が書かれているように、本書は心臓麻酔を初めて経験する麻酔科医や翌日心臓病の患者を担当することになっている研修医が、簡単に理解できるようにコンパクトに必要な知識を吸収することができる入門書として利用していただくことを目的とした

プロフィール

(ゆげ・おさふみ)

- ◆一九七三(昭四八)年 広島大学医学部卒業
- ◆一九七九(昭五四)年 医学博士(広島大学)
- ◆一九八二(昭五七)年 一九八三(昭五八)年 アメリカ合衆国エール大学麻酔科留学
- ◆一九九一(平三)年 医学部麻酔・蘇生学講座教授



越智 それは子どもの不登校のときの理由と非常に似ていますね。

兒玉 だからオリキャンはぜひ行ってほしい、でも行かなくても友だちはつくってほしい。そんな感じですか。

中川 あとオリキャンに行った人、もしくはオリキャンのスタッフがそういうことをちゃんと考えてやるということが必要だと思います。ともすればオリキャンをやった人が、例えば総合科学部で言えば、オリキャンをやったから私たちが総合科学部生だ、みたいなところがあるんです。

確かにそれはそれでいいんですが、そういった人たちが、私たちが総科生だ、とか私たちが工学部生、そういったような目を持つのはやめてほしい。これはあくまで活動の一つなんだから、あなたたちがたまたまそこに出ているが、あなたたちは代表でもなければ中心でもないんだ、ということ。もともとやっていた人たちが、そういう活動をしていない人たちに声をかけて、内に固まっていくのではなしに、外に目を向けるということをしてほしいな、とそう思います。

越智 排他性を突き崩していくというのは、むしろそれは、学生の皆さんが、いい伝統をこれからつくっていくという方向で解決しないと仕様がなくなってしまうんですか。

しかしそういう、何ていうか、排除の思考みたいながあるわけですか。

北村 ありかねないという雰囲気はあります。

中川 それが本当に、一番の問題だと

思います。

オリキャンは、確かに僕は必要だとは思いますが、ただオリキャンとかそういうことをやっている人が、例えば私たちがメジャーだとか、そういった意識があるというのは許せないのでは。

越智 ああ、学部の顔になってしまっただね。

中川 そうだと勘違いしているんです。それは改めてほしい。やっている人たちにそういった意識がある。

藤田 結局サークルにも属さないという人が大学の内にもいますので、そういう人が何ができるかというのを、大学の中で見つけていかなければいけないと思うんです。そういうことが西条では見つけにくいんじゃないか。

それで結局、大学をやめていくことになったり、学校に来ないだけで西条にいるだけという、そういう環境をつくりやすいところではあるんじゃないのかな。

越智 新入生に対するアドバイスとしては、そういうふうにとんどんつながりを求めてほしいということですね。大学としてはこういうこともありませう、こういうこともありませう、ということを一応出していき、きつかけだけはちゃんと情報として与えておくということですね。

安藤 ありがとうございました。どうまとめればいいのか。いろいろと貴重な意見を出してもらいましたので、これをまとめまして、あとは申し訳ないですが、こちらの編集委員に任せていただいで、一応皆さんの気持ちという

か、この場の雰囲気というのはつかまえたつもりですから、それに添ったかたちでまとめたいというふうに思っています。

貴重な意見をありがとうございました。時間も来ましたので、一応今回はこのあたりでお開きしたいと思います。



●座談会開催日時 平成八年二月二十六日(月)

●開催場所 文学部小会議室

●写真協力 滝本勇紀(経済学部三年)